



# 碧南ロータリークラブ週報

第2243回例会 平成16年10月27日(水) 晴. 最高18.0℃. 最低9.8℃

- 会長 池田 弘孝 ● 幹事 黒田 昌司 ● SAA 小笠原良治
- 例会日 毎週水曜日 12:30 ■ 例会場 碧南商工会議所ホール
- 事務局 碧南商工会議所内 〒447-8501 愛知県碧南市源氏神明町90  
TEL <0566> 41-1100 FAX <0566> 48-1100  
ホームページ: [http:// www.hekinan-rc.jp/](http://www.hekinan-rc.jp/)  
E-mail: [info@hekinan-rc.jp](mailto:info@hekinan-rc.jp)
- 会報委員 鶴田光久・杉浦昌裕・石川唯司・竹中 誠

ロータリーを  
祝おう

100年の歩み

2004～2005年度  
国際ロータリーのテーマ



## ● 斉 唱

ロータリーソング「ロータリー賛歌」

## ● 職業宣言の朗読

職業奉仕委員会 副委員長 杉浦 晴彦君

## ● 本日のお客様

名古屋大学 教授 竹内 常善様  
高 浜RC 深谷 幸則君



本日のお客様



池田弘孝会長

## 会 長 挨 拶

会長 池田 弘孝君

台風のは地震で日本に住んでいる限り避けられない天災にみまわれました。新潟中越地震は意地悪く台風による雨で地盤をやわらかくして、すぐ直下型で揺るので被害甚大で最悪です。今回は、特に今までにない大きな余震がすでに4百回以上続いているようです。交通は遮断され、電気は消え、水や食料もなく自分の家に入れない状況が続いて、これからの寒さをどうしのぐか心配が重なるようです。私ごとですが60年前に初めて体験して以来、恐ろしさはいまだに頭から離れません。今回の中越地震は広い範囲で地殻変動があり、逆断層で1.4mずれると報道されました。火災が起きなくて良かったようです。地震、雷、火事、親父と恐れられた時代もありましたが、変わったのは優しくなった親父だけです。

専門家によると東海大地震がいつ起きても不思議でない時期だそうです。よそ事ではなく用心をするようにと言われても、何をどうするのかわかりません。私が勝手に思いますに、市役所や商工会議所は大丈夫でしょうが、碧南高校はどうだろうか？チョット心配です。この際耐震対策でお金をかけるなら、全面移設の方がよろしいではないかと思っている一人です。

## 幹事報告

- 他クラブの例会変更につきましては、お手元の資料でご確認いただきたいと思います。
- 10月27日に開催された臨時理事会のご報告を申し上げます。

- ①新潟中越地震への義援金を一人1,000円で75名分計75,000円を予算より支払いました。
- ②市民ふれあいバザーの寄付の品物の数をご報告します。

10月6日に53点

10月13日に40点です。たくさん出して頂いて、ありがとうございました。

- ③11月3日の例会は法定休日により休会です。
- ④碧南RCの例会変更につきましては、お手元の資料を参照して下さい。
- ⑤指名委員会の委員選出につきまして、会長より報告がありました。

細則1-1

指名委員選出

永坂 隆一君  
榊原 義嗣君  
長田 昌昇君  
加藤 良邦君  
池田 弘孝君  
岡田 赳勇君  
黒田 昌司君



## 委員会報告

〈出席奨励委員会〉

総会員数 75 名 (内出席免除者 15 名) 出席者 58 名	
出席対象者 48 / 60 名	出席率 80.0 %
欠席者 17 名 (病欠者 0 名)	前々回修正出席率 100 %

※三週連続出席率100%の場合は記念品を差し上げます。

〈ニコボックス委員会〉

- 永坂 隆一君 先週の職場例会、大浜上の宮熊野神社へお越し頂き有難うございました。
- 長田 徳雄君 次男の長女が誕生しまして、孫は3人となりました。
- 竹下 豊君 卓話の講師竹内先生を紹介します。
- 加藤 知彦君 11月2日より東京都美術館で開催される第36回日展彫刻の部に長男が初入選することが出来ました。
- 奥田 雪雄君 本日10月27日親父が90才の誕生日を迎えました。長寿を喜んでおります。
- 清澤 聡之君 清澤満之記念館が正式にオープンしました。改めまして、ご招待させていただきます。

早退 4 件 合計 17,000 円

## 卓話

「現代におけるエリート像のありかたについて」

名古屋大学 教授 竹内 常善氏

戦後教育の見直しを迫る声が聞こえるようになって久しい。曰く、「愛国心を涵養せよ。」「我国家固有の淳風美俗を回復せよ。」「もっと郷土愛を。」「家庭内教育の復権を。」云々。ただ、教育体系のうちで、戦前と、どこが変わったのかが、まず問われるべきである。やや単純化して言わ

せて戴くなら、実質は、男女共学制、単線教育、高学歴化、この三点に尽きる。教育改革を叫ぶ人たちが、こうした制度的な側面を無視して、ただソフト面だけで絶叫しているのは、やや奇異な感もする。要するに、自分で「愛国心」とか「郷土愛」や「固有の淳風美俗」を語る自信がないから、学校でやって欲しいとっているようなものである。今になって男女共学を廃止しろと言うほどの強固な意見の持主は見あたらない。高学歴化についても、大方の人士はどうやら反対する勇気もなさそうである。単線教育や複線教育については、意味内容の理解も出来きれていない。それでいて「改革」とは、可笑しい限りだ。「改革」を盛んに叫ぶけれども、まるで中身の伴わない三流政治家の絶唱と異なるところはない。



現代における日本の困難は、社会全体がハイコスト・エコノミーになっている処にある。世界記録を更新中の累積赤字を積み上げて責任を感じない「行政」も、その一端を担っている。医療分業も医薬分業も曖昧にした薬漬け医療もそうだ。まともに勉強もしない若い世代をモラトリアム状況において、それを高等教育と信じ込んでいるような社会が、まっとうな国際競争力を維持できるとは信じ難い。すべてが、長期的には法外なコストになって跳ね返ってくることを、多くの論者もマスコミも真剣には扱おうとしない。

戦前の教育は、男女別学だけでなく、人材育成の経路を早期に振り分けていた。実業学校や師範学校系の系列、さらには軍人になるための幼年学校や士官学校、そして、大学に進学するための中学・高校のルートは夫々異質のものとしていた。進学率の低さに救われていたとはいえ、中学から大学（とりわけ帝国大学）を目指すものにとって、人生を論じ、国家の将来を展望して、議論百沸する時間は十分に保障されていた。ややもすれば、形式的な枠組みの範囲に止まる者が多かったにせよ、世界観や歴史観を語れる人材になれることが、社会から要請されていた。「人間には二種類ある。自分のことしか語れない輩と、パブリックを語れる人間だ。」と柳田國男が看破して見せた姿勢は、このような社会的雰囲気を見事に伝えている。

だが、状況は1945年8月を境に大きく変容した。15日を「終戦記念日」と呼ぶにせよ、「敗戦記念日」と呼ぶにせよ、その日から、日本社会はエリート層の教育に関する基本的構想力をまるで放棄したように見える。鮮明な形でこの国の歴史開闢以来の不祥事に責任をとろうとした幾多の人士は、その日と前後して一斉に果てた。その後、責任に只管口を閉ざしたり、一方的に批判するだけの人物の横行する時代がやってきた。

それでも、逝ってしまった者達に代わって、悲しみを胸に秘めながら新たな経済戦争の渦中に身を投じる者たちが一部にいた。「日本軍国主義」の批判に躍起となり、「五誓」や「軍人勅諭」の封建性を論う人々の協で、日々、彼等は自己の内面に向かって「一、自分は気節に生き実行を尚ぶ」「一、自分は信義を重んずべし」「一、自分は質素を旨とすべし」と叫びかけながら、企業経営や国際的な資源争奪戦略の舞台に突入した。彼等の多くが自分を見失うことなく、節度と品位をもって、人種的偏見とハード・ネゴの世界を駆け抜けていった。その後、呆れるほどに順調な経済成長の局面が現われた、それは、実に長期にわたる右肩上がりの構造であった。

20世紀後半の数十年の日本は、正直のところ、誰が動かしても上手く行くような、そのような恵まれた時期であった。そこには、それを準備して寡黙のうちに去っていった人物たちや、戦後国際経済の枠組みや、戦後の科学技術の趨勢など、実に多くの要素が絡み合っていた。しかし、人々はそうした史的背景や国際的動向よりは、眼前の成長実績や収益動向の見事さに瞠目してい

た。そして、この時期、俄かに得られた成果の上に、上位に立つ人物たちを神輿のように飾りたてる装置や枠組みが急激に整備されていった。そのような風潮を一笑に付す経営者や政治家も一部にはいた。しかし、大方はそれに従うことで自己の権威を増幅できるかのような錯覚に捉えられ、そこに耽溺した。それがお雇い経営者の悲哀であり、成上がり者の虚勢であることに気づかない者すら続出した。それでも、事態は些かの蹉跌もなく進捗しているように見えていた。そこそこの銀行でも、多少の粉飾や資料の誤魔化しはやっていた。ただ、政府による金融検査の後に、頭取が「実は…」と一席を設けて監督官庁に謝る程度には、情報を公開していた。また、その範囲で許される失敗が殆どだった。経済が製造業中心に動いていたために、粉飾が外部からも見えやすい構造になっていたことも手伝っていた。

産業構造が「高度化」し、経済の国際化と情報化が容赦なく進み始めたとき、この国における経済の枠組み以上に、経営者や政治家のバック・ボーンを抜本的に入れ替えなくてはならないと気づいた人々はいた。ある者は、その手がかりを初等教育からの制度変更に求めようとしたし、別の人々は、高等教育の再編から方向を見出そうとしていた。社会教育の枠組みを根底的に変革する構想を持ち合わせていた者たちもいた。だが、社会は成長神話と日本的経営の神秘的成功談に酔いしれていた。虚飾も枠組みが大きくなると、仕掛けの維持のために欺瞞が欺瞞を呼び、その経費が累乗的に拡大することを、殆どの人が気づいていなかった。こうして、日本経済は所帯の大きさの割には、実に貧困なトップしか持ち合わせない、アンバランスな枠組みを持つに至った。このことに関する反省点は多々存在する。ただ、ここでは、戦前からの悪しき継承点にだけ触れておこう。

戦前の段階でも問題はたっぷりと遺されていた。エリート層は、彼等が恵まれた人材であるとして選ばれたという、たったそれだけの理由で世界観や歴史観を語る資格が与えられたのではない。その前に、人間は永遠に全知全能たりえないことを悟りえること、ただ「中間的存在としてしか生きていけないという覚めた認識」に辿り着ける人間であること、そうした人間的悟性の水準が、エリート達には求められていた。限界があらかじめあることが想定できたとしても、エリートは意思決定をし、複雑な組織を動かさねばならない。意思決定には瑣末な日常的な課題もあるが、民族の将来に致命的に関わることも、組織の命脈に不可避的にかかわることもある。にも拘わらず、トップ・リーダーにとって、得られる情報の実質は、その多寡にもかかわらず、常に完璧からはほど遠い。そのような状況で、世界観や歴史観に関わる大前提をおき、そこから合理的に辿り着ける方針を決定していくしかない。そのことは、常に意思決定の最終責任者を明示することでもあった。そのことを恐れず、意思決定の重責を泰然と担いうる者だけが、エリートの名に値する。この基本原則が軽視されてきたことは、日本のエリート教育がまだまだ本格的なものになっていないことを意味していた。

我国が、このまま「モノづくり」だけの得意な「世界の職人カースト」国家として永らえるのか、それとも、特異な発展過程を実現した第三の道に突き進む「新たな価値創造地域の核」となるのか、それについてここで判断することはできない。ただ、新しい可能性のために、人知れず努力している者達の障害物にだけは、差し当たりなりたくないものである。

次回例会案内 11月17日（水）

卓話 「お茶で健康づくり」

講師 (株)葵製茶 代表取締役 本田 綾乃 氏